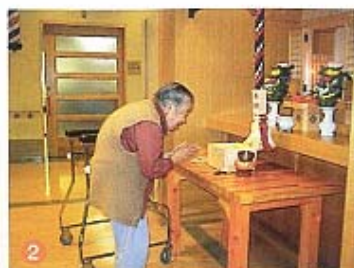




板戸で仕切られた療養室は個室感覚、障子や欄間がなつかしい



エレベータホールの地蔵堂には、お年寄りが手を合わせる姿が



医療法人社団汐咲会。左：井野病院。右：介護老人保健施設しおさきヴィラ



黙想コーナー「しおさい」は、静かな時間と空間を楽しむ癒しの場



協力：癒しの環境研究会

## 暮らしのなかの癒し

# 井野病院・介護老人保健施設しおさきヴィラ

病院の求める「機能性」と「癒しの環境」をいかに両立させるか？井野病院と併設の介護老人保健施設しおさきヴィラでの「癒し」への取り組みは、こんな思いから始まった。高齢者施設には「あたたかみのある生活環境」が必要だと言われるが、それはもちろん病院にも求められて然るべきものである。

階段室を彩る壁画は圧巻。風情のある和風のトイレは、一流旅館のようである。  
(本文69頁参照、撮影・井野病院)



イングリッシュガーデン。少女のバードテーブル（左）は、ガーデンの人気者



6・7 男女共用、床の間付きの癒しのトイレ。くつろげるトイレは一番の癒し

8～10 「リハビリを兼ねて階段を歩きましょう！」と言われても、白い壁と小さな癒しがない階段を歩くのは、心寂しいもの。そこで、階段室の壁を、色とりどりの壁画で飾った。地階から最上階まで、癒しの壁画が繰り広げる不思議の世界



# 施設の癒しの環境が与える影響

暮らしの  
なかの癒し



協力：  
癒しの環境研究会

介護施設は生活の場だから癒しの環境が必要だが、病院は機能的な建物でなければいけないといわれているが、それっておかしくない？ 当法人は、100床の一般病院と100人の入所者のための介護老人保健施設をもっています（1頁、写真①）。当施設の時系列的な癒しの工夫を紹介し、その環境がユーザーと職員に与えた影響を考えます。

1997年12月に老人保健施設おさきヴィラがオープンしました。そこにはとても変わった癒しがありました。

## ●お地藏様\*\*（1頁、写真②）

なぜ？ 入所者の平均年齢は82歳。彼らの青春時代には、村社会があり、水田や塩田が広がり、過酷な労働の合間に、月々の催し物があり（今ていうイベント）そのつど近くのお地藏様のお堂に子どもも大人も集まりました。夏には映画会。スイカがあって、大きな釜で炊いたおむすびが、おかずはなかったけれどとてもおいしかった。なんにもないときでも、年寄りはいつもお地藏様に集まっていました。そんな環境で過ごしてきた高齢者が、急に鉄筋コンクリートの施設に入って、本当に心から安らげるでしょうか？

いま、1階のエレベータホールにあるお地藏様には、毎日お風呂へ行く人や、デイケアの人が、「チーン」と鐘を鳴らして、手を合わせる風景があります。ときどきお賽銭が入ります。お正月からもう8,453円もたまりました。これは、国際医療支援ボランティアのAMUDAに行きます。七夕には、笹飾りがゆらめきます。願いを込めた短冊、「どうぞ良縁が授かりますように」……？ いつまでも乙女心は失われません！

## ●板戸と欄間\*\*（1頁、写真③）

和紙を貼った板戸で仕切られた多床室は個室同然。欄間と明かりがなつかしい。医師の回診。「まあ

先生！ ようこそ、こんなむさくらしいところへ……。どうぞお入りください」「おじゃまします」完全にマイホームです。

## ●癒しのアリス\*\*（図1）

ちょっとおしゃまなワンちゃんです。名前はアリス、でも「しろ、しろ！」とか「ぼち、ぼち！」とか呼ばれています。職員さんに隠れてお菓子をくださる入所者には、特別尻尾を振ってついていきます。こっそりお菓子をもらっているはずなのに婦長さんにはいつもばれているみたい……。どうしてかしら？

訓練のおじさんにお菓子をもらってはいけないと言われているけれど……。入所者の人も婦長さんから「この子はちょっと太めだから食事療法しているの、お菓子をあげないでね！」と言われているみたい。お互いに我慢は心と体によくないのよ！

## ●屋上菜園\*\*（図2）

小さいけれど、二段階で車椅子でも立ってでも作業できる高さにしました。夏にはトマトがたくさんできました。また、三度豆も収穫できて、3時のおやつに塩茹でしていただきました。冬には、細いけれど感動的なからい大根ができました。昔なつかしく、ちりめんじゃことお醤油で、ご飯をいただきました。本当は1階が理想的なのですが、あいにく道路に囲まれていて……。でも、蚊はあがってこないのです。見晴らしもよく

\* 井野病院（内科・外科・整形外科・眼科・一般100床）

\*\* 介護老人保健施設おさきヴィラ（入所100名・デイケア60名）

兵庫県姫路市・医療法人社団汐咲会  
常務理事

井野節子

Ino Setsuko



図1 動物とのふれあひも、利用者の“癒し”



図2 見晴らしのよい屋上で季節の野菜を栽培

て、婦長さんは夏のビアガーデンを考えているようです。「ノンアルコールビールにしないでね！」

### ●癒しの空間・しおさい\*

(1頁, 写真④)

たった四畳半くらいの空間です。デンマーク製の長椅子が一つと小さな肘掛け椅子がおいてあります。本当に癒される静かな空間で、大変人気があります。外には、冬は梅、春は椿、初夏は竹の子、夏は孟宗竹のみどりの風が入ってきます。

竹の子が出る季節は大変です。「ちょっとおねえさん！あの竹の子は早よ採らんと、硬うなってしまうよ」と毎日入れ替わり立ち代わり受け付けにご注進です。忙しいからと職員がほうっておいたら、誰か黙って掘ってもって帰ってしまった……！

柱には“色即是空 空即是色”の磁器タイルが、

### ●イングリッシュガーデン\*

(1頁, 写真⑤)

開院当時は、実がつかないモチノキ1本、私の希望の沙羅の木2本、もみじ1本と、地面を覆うように阜月のよせ植えがあり、鬼門のところに南天の木があって、中野滋さんの少女のバードテーブル(石の彫刻)があっただけの、どちらかといえば、やや暗い感じの庭でした。暗いのをカバーしよう

と、4本のビームライトアップがついていたのですが、それも年とともに1つ切れ、2つ切れして、いつの間にかライトはなくなりました。だいたい病院のメンテナンスなんていうのはその程度のものでして、「花よりだんご」。どうしても手のかかる設備は後回しになってしまいます。

当時よりずっと元気なのは、彫刻の少女。はじめは患者さんに観音様といわれ、職員はナイチンゲールと呼び、いまは名無しの少女ですが、年とともに色気も出てきて、今ではイングリッシュガーデンのホストになっています。

あまり広くなく、しかも掘って囲まれて、日差しがあまりない庭なので、イングリッシュガーデンにすることは本当に迷いました。近所の園芸店にお願いしたら、そこのご主人が「わしは、力仕事しかできんけど、おかあちゃんがセンスええさかいに、なんちゅうんかほらイングリッシュ何とか、いっぺんやってみますわ」と、ご夫婦でつくってくれました。ご主人が自慢の力を振るい、ツルハシで深く深く土を掘ってくれて、わるいセメントのかげらやガラクタをきれいな土に変えてくれたおかげで、冬でもいっぱい花が咲き、枯れるものもなく、カサブランカやハーブ・バラ・ジャスミンなどが咲き乱れます。とても明るく感じられます。園芸店のご主人のお

かあちゃん(奥さん)への愛情が見事に花となってくれたようです。

入院の患者さんがよく椅子に腰掛けて眺めています。どちらかといえば男性のほうが多いように思います。男性のほうが花が好きなのでしょいか？

### ●癒しのトイレ\*(1頁, 写真⑥⑦)

トイレは臭い……というのは昔の話！ いまの 트렌ディーなトイレは床の間付きよ！というのがコンセプトの病棟のトイレです。

実は病棟のトイレは48人につき男大ブース2個・男小1個・女2個・身障者用1個でした。朝ともなれば、車椅子対応の身障者用トイレには列がでえます。だってブースは小さくて、車椅子や点滴の人は使えないのです。なんて意地悪な病院！と思われたくない……。感染管理のための手洗い場(スタンダードプリコーション実施)をつくる機会に、トイレを全面改装しました。

スペースは限られているので、結果として全部男女共用。洋式トイレ2個・男小1個・癒しのトイレ2個・身障者用トイレ1個となり、個数としては変わりありませんが、1個のブースが広くなり、車椅子対応が計3個・点滴対応は全部になりました。

使い勝手は抜群によくなりました。すでに2年経ちますが、癒しのトイレ、他のトイレともいつも



### 暮らしのなかの癒し

きれいで、臭いもありません。患者さんが臭いの元を残さないできれいに洗い流してくださるからでしょう。ちなみに自動洗浄ではありません。トイレにはBGMを流しています。いまは鶯が鳴いています。「今日も快便ホーホケキョー！」

這ってでもトイレへ行きたい……。これは人間の哀願にも似た希望でしょう。トイレがきれいになって、長居もOKで、音も気にならなくなって、おむつの人がトイレを使われるケースが増えました。「トイレがきれいということは、私（患者さん）が病院に大切にされていると実感できる！」というお言葉をいただいています。

#### ●階段室の壁画\*

（1頁、写真⑧～⑩）

エレベータは2台あります。職員は階段を使いましょう！ リハビリテーションに階段を使ってくださいね！と言われても……。わびしい気持ちになるのです。階段は小さな明り取り窓があり、ポロな蛍光灯がついていて、異様な緑の避難路表示灯があるだけです。壁画の効用をイヤというほど欧米旅行で見せつけられた私は、壁画を描いてみようと思い立ちました。さて、誰が描くのでしょうか。

困りました。プロの業者を当たりました。きれいでリアルなのですが、ユーモアは感じられません。ましてここは病院です。フワとした温かみがなければ何にもならないのです。お店と違い、

単一のコンセプトはつukれない。個々人多様だから……。生と死のなかであって、希望がもてる絵でなくてはならないのです。思い余って出した結論が、「若者のエネルギーをもらっちゃおう！」ということです。

かくて、京都造形芸術大学の生命倫理の小林昌廣氏にお願いすることになりました。小林氏は若い教え子たちのプロジェクトを組んでくださって、若者の考える生命の危険にさらされている人へのメッセージを絵にしてもらいました。そのメッセージがこれです！ ゆっくりご覧ください。作成期間約2か月、熟考期間永遠、製作延べ人数245人、延べ時間3,074時間でした（図3）。コンセプトは“みんなの木とみんなの気”。さすが芸術家の卵です。

製作は主に夜。製作途中で議論噴出し、洋画チームと日本画チームが泣き出す場面もありました。彼らの真剣さは入院患者さんにも伝わり、学生と患者さんの対話が生まれました。学生には、おやつが要りませんでした。患者さんからの差し入れが大変多かったからです（総務課も喜んでます）。

ところが問題が発生！ 突然観音様の輪郭が出現したのです。管理職は、「あれほど観音様や仏様は描かないでといったのに！」と私に詰め寄りました。私はおろおろして、小林氏に「観音様は困るのです」と消すようお願いしました。答えは「消せません！」「エー、そんな殺生なー」「消せというほうが



図3 芸術家の卵たちの手により、階段室が色とりどりの壁画で飾られる

殺生でしょう！」「……」結果、患者さんは観音様の絵を「べっぴんさんやなー」「きれい！」と喜び、病院側が案じるほどショックを与えてはいませんでした。

逆に嫌いな絵を尋ねたところ、「蓮の花」が圧倒的でした。ステレオ効果というのでしょうか。蓮は葬式のイメージと結びつくようです。インドやエジプトでは蓮は高貴な花なのです。高貴だから仏教に使われたのに、仏教が葬式化したから、蓮＝葬式なのですね。仏教を愛する私としてはいささか残念です。

全体的に壁画は好評で、階段を利用する人が大幅に増えました。狭くて暗い階段室が、明るく楽しい場所に変身したのは当然です。たくさんの個性が発信してくれたメッセージがさまざまな個性に働きかけて、悲しみや苦しみ、楽しさや喜びに呼応してくれています。

#### おわりに

人々の心のゆらめきを受け入れる余裕が病院側にはない分は、環境に頼らざるをえないでしょう。反対に環境にゆとりの心があり、楽しみがあれば、職員の心も癒され、癒しのある医療・看護・介護ができるものです。遊び心は大切な癒しです。ちょっとした工夫は工夫の元にある優しい心を利用者に与えます。環境整備はお金の問題ではなく、心の問題です。癒しの壁画はいつでも皆様をお待ちしています！ どうぞお越しく下さい。